

- ・県オリジナル柑きつ「せとみ」は、産地の振興を牽引するブランド力のある柑きつとなるよう、生産拡大の取組を進めている。
- ・品質向上による商品力の強化と安定収量確保が課題となっている。
- ・出荷量の増加と安定生産のため、産地での栽培の実態を調査し高品質果の連年生産の栽培技術、指標を検討し現地指導の基礎資料とした。

具体的な成果

■ 生育・品質調査結果

- ・発芽期は平年より8日遅く、開花期は3日早めとなった。
- ・果実肥大は平年より大きく推移。
- ・12、1月の気温の低下と降水量が少なかったことから、低糖度、高酸傾向となった。
- ・樹冠容積当たりの収量は、1.3～4.5kg/m³、10a当たり収量は466kgから3,600kgまでほ場間で差があった。

■ 栽培管理検討

- ・連年結実ほ場での樹勢、管理データを中心に、栽培管理方法を検討。
- ・**着果、収穫量の基準として樹冠容積当たり2kg/m³の目安を設定し、今後、検証する。**

普及指導員の活動

■ 生育、果実品質調査

- ・調査ほ場の設置(県内6か所)
- ・生育・収穫量調査の実施
- ・栽培管理状況聞き取り

■ 栽培研修会

- ・県域集合研修会 3回実施
- ・地域別栽培研修会
- ※県域での集合研修で、統一的な栽培管理、ポイントを周知
- ※県集合研修と同一の内容で地域別研修で、広範囲の生産者へ情報提供

■ 栽培管理検討の開催

- ※各産地での生育と栽培・管理状況の調査により、短期間で対策、栽培方針等を検討

普及指導員だからできたこと

1. **各産地に調査ほを設置し、調査項目を統一することで、早期に課題解決に向けた取り組みを実施**
2. 県域集合研修から、地域別栽培研修会を実施し、**より多くの生産者に統一の管理ポイントを周知**

「せとみ」の高品質果の連年生産

活動期間：平成29年度～継続中

1. 取組の背景

山口県のオリジナル柑きつ「せとみ」は、産地の振興を牽引するブランド力のある柑きつとなるよう推進品種に定め、生産拡大の取組を進めており、品質向上による商品力の強化と安定収量確保が課題となっている。

出荷量の増加と安定生産のため、産地での栽培の実態を調査し高品質果の連年生産の栽培技術、指標を検討し現地指導の基礎資料とする。

2. 活動内容（詳細）

（1）調査活動

ア 生育、果実品質調査

（ア）調査ほ場の設置

現地調査ほ場を各産地で設置し調査した。

（イ）調査期間

平成29年4月～平成30年3月

（ウ）調査方法

生育調査は発芽期、開花期については4～5月に調査した。

果実調査は果実肥大を7～11月にかけて毎月20日に、果汁成分について1月20日、2月20日に調査した。

イ 収穫量調査

ほ場当たりの収穫量、調査樹（3樹）の収穫量、樹冠容積を調査し、10a当たりの収穫量を換算した。

ウ 栽培管理状況

かん水、施肥、病害虫防除実績について聞き取った。

（2）栽培研修会

ア 県域集合研修会

- ・5月、10月、1月、3月の4回計画。3回実施。

（1月は、寒波による早期収穫対応の為に中止）

- ・各時期での主要な管理作業と作業ポイント・留意点を生産者に周知。

イ 地域別栽培研修会

- ・各産地の生産者への周知のため、地域別にも栽培研修を実施。

（3）推進検討会

- ・（1）の調査活動結果を整理し、高品質・連年結実に向けた栽培管理や各産地での生産拡大に向けた取り組みを検討。

3. 具体的な成果（詳細）

（1）生育調査・概況

発芽期は平年より8日遅く、開花期は3日早めとなった。
 着花量が少なかったため、生理落果率は平年並みとなった。
 黒点病の発生は6月以降、平年よりやや多い傾向で推移した。
 果実肥大は着果が少なく、8、9月の十分な降雨もあり平年より大きく推移した。

9月中旬のまとまった降雨の後、裂果の発生が見られた。

果実品質では、12月、1月の気温の低下と降水量は少なかったことから減酸、着色が遅れ、平年と比べて糖度は低め、酸度は高めとなった。

1月中旬の気温の低下、柑橘の低温情報を受け、1月中旬には収穫された。収穫時、貯蔵後のヤケ果の発生は少なかった。

樹冠容積当たりの収量は、調査データのある3ほ場で1.3~4.5kg/m³、10a当たり収穫量は466kgから3,600kgまでは場間で差があった。周防大島町久賀の調査ほ場では、調査樹収量でH29年21.7kg、H28年33.8kg、H27年23.5kg、H26年31.1kgと連年結果している。

ア 生育時期

表1 発芽期、開花期

調査地点	発芽期	開花期		
		始	盛	終
岩国市	4/24	5/18	5/22	5/27
周防大島町	4/15	5/16	5/19	5/22
防府市	4/16	5/16	5/20	5/25
下関市	4/19	—	5/20	5/20
萩市	4/12	5/9	5/16	—
柑きつ振興センター	4/16	5/12	5/17	5/21
柑きつ振興センター(平年)	4/8	5/14	5/20	5/25

イ 果実ヨコ径の推移

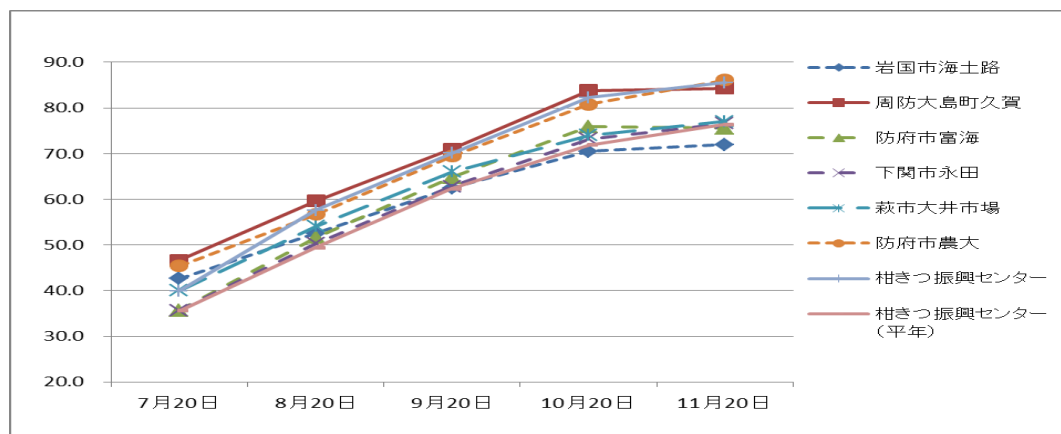


図1 果実ヨコ径の推移 (H29)

ウ 果実品質調査

表2 果実品質

調査地点	1/20			2/20		
	糖度	酸	糖酸比	糖度	酸	糖酸比
岩国市	10.7	1.53	7	13.7	1.22	11.2
周防大島町	12.2	1.35	9.0	12.8	1.09	11.7
防府市	12.0	1.27	9.4	—	—	—
下関市	13.4	1.60	8.4	13.8	1.54	9.0
萩市	12.5	1.61	7.8	12.9	1.29	10.0
柑きつ振興センター	13.2	1.68	7.9	13.9	1.36	10.2
柑きつ振興センター(平年)	13.8	1.45	9.5	14.7	1.26	11.7

※岩国 1/12、2/19、柳井 1/29、2/26、防府 1/11、下関 1/19、2/14、萩 1/12 調査

エ 収量調査

表3 収量、栽植距離・本数

調査地点	調査樹収量(kg)	調査樹樹冠容積(m ³ /樹)	樹冠容積収量(kg/m ³)	栽植距離(m×m)	栽植本数(本/10a)	10a当たり収量(kg/10a)
岩国市	—	14.3		2.5×2.5	160	※466
周防大島町	21.7	16.7	1.3	3×3	111	2,408
防府市	40.3	17.5	2.34	5×3	67	2,689
下関市	33.4	14.9	2.24	3.7×2.5	108	※3,600
萩市大井	—	—	—	2.5×3	128	※1,400
防府市農業大学校	19.5	4.3	4.5	2.5×3	133	2,593

※岩国、萩：10a 当たり実収量(収穫量/面積、kg/10a)、岩国、下関：着花が少なく調査樹を変更

オ 栽培管理実績

表4 施肥、病虫害防除

調査地点	施肥量(kg/10a)			殺菌剤回数	殺虫剤回数
	N	P	K		
岩国市	48	23	47	9	11
周防大島町	17	7	10	6	8
防府市	67	16	19	7	9
下関市	11	13	7	6	3
萩市	36	35	22	—	—
防府市農業大学校	14	12	9	11	10

表5 摘果時期、かん水

調査地点	摘果時期	かん水

	粗摘果	仕上摘果	樹上選果	(時期、量)
岩国市	7月下旬	8月下旬		4～9月に週に2回(降雨時除く)、10月以降週1回
周防大島町	7月下旬	8月下旬		370t/10a/年
防府市	7/20	8/21	—	7/30:200L、8/12:500L、8/29:1000L/樹
下関市	7/6	8/21	—	8月2回
萩市大井	7月下旬	8月下旬	—	8月
防府市農業大学校	7/28	8/21	—	7/29、8/26、9/2

4. 農家等からの評価・コメント（調査の担当農家や指導員）

定点調査を受けることにより、せとみの連年結実には、県域での集合研修で説明があった、灌水と早期摘果が重要だと改めて認識できた。

寒波等の影響による収穫や貯蔵への影響など、まだ課題はあるが、オリジナル品種として、次第に定着してきているせとみを既存品種と組み合わせ経営に取り入れていくことを検討したい。

5. 普及指導員のコメント（就農技術支援室・主幹・原川和彦）

県オリジナル品種せとみの普及推進にあたり、県域での調査ほ場を設置し、生育と合わせ、栽培管理を調査することで、対策、方向性を探ることができている。今後も、調査を継続し、栽培研修等により生産者へフィードバックすることで、栽培面からの推進を、また関係機関、流通団体との協議を継続することで、販売面から生産拡大を支援していくことで、生産者の所得向上や産地の維持・発展に寄与することを期待している。

6. 現状・今後の展開等

産地全体では、平成 27 年産は表年で収穫量が多く、平成 28 年産は裏年傾向で収穫量は少なくなり、平成 29 年産も着花、果が少なく平成 28 年産と同じような傾向となった。

今後の栽培管理では、樹高が高く、密植となった園地では縮伐、間伐を行う。1、2月の低温による落葉等、樹勢の低下が懸念されるため、せん定時期は遅らせ、軽めのせん定とする。

土壌改良、液肥の施用により樹勢を維持し、引き続き連年安定結果を目指して着果管理、樹勢向上対策に取り組む。栽培管理状況、着果量の推移について次年度以降も継続して調査し連年生産できる樹の栽培管理、着果の基準等を確認する。

着果、収穫量の基準として樹冠容積当たりの収量は参考になると思われ、2kg/m³ぐらいを目安に着果量の基準を検討していく。